

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	凜 栗東		
○保護者評価実施期間	2026年 1月 10日		2026年 2月 1日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	20名	(回答者数) 11名
○従業者評価実施期間	2026年 1月 10日		2026年 2月 1日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	4名	(回答者数) 4名
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 2月 7日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子ども一人ひとりの主体性を尊重した支援	子どもたち一人ひとり、抱えている課題や持っているスキルはさまざまなので、「できる・できない」にとらわれず、「まずはやってみること」「いろいろなことに挑戦すること」を目標に、職員は過度にかかわりすぎるのではなく、必要な場面で少し介入し、子どもたち同士が考え、助け合いながら過ごせる環境づくりを大切にしている。	活動や生活場面の中で、それぞれの得意分野を活かせる小さな役割を設定する。 すぐに答えや解決策を示すのではなく、ヒントや問いかけを中心とした関わりを意識する。また、子ども同士で解決できそうな場合では見守りを大切に、自己決定力、問題解決力の向上につなげる。
2	専門的職員の配置による安心・安全な支援体制	看護師や専門的職員が日常的に子どもの様子を観察し、心身の変化を専門的な視点で捉えながら、必要な支援のタイミングを職員間で共有している。過度な介入とならないよう配慮しつつ、子どもが安心して主体的に行動できる環境づくりを意識している。	看護師や専門的職員の視点を職員間で共有し、日常の支援により反映させることで、支援の質を高めていく。また、専門性と子どもの主体性のバランスについて継続的に振り返りを行っていく。

3			
---	--	--	--

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	子ども一人ひとりの主体性を尊重し、職員が必要以上に介入しない支援を行っている一方で、支援の意図や関わりが外部からは分かりにくく、個々への支援内容や成長の過程が十分に伝わりにくいという課題がある。	日常的な支援が生活の流れの中で自然に行われている事が多く、意図的な支援や個別の関わりが記録や言葉として整理されにくい状況が生じている。また、子どもたち自身の気付きや成長の過程を重視するあまり、職員による関わりの意味や支援のねらいを外部に十分示す機会が少なくなっていることが、支援内容が見えにくくなる要因であると考えている。	日々の支援や子どもの成長の過程を職員が意識的に振り返り、記録や共有を行うことで支援内容の整理を図るとともに、具体的な場面を通して支援の意図や成果を分かりやすく伝えていく必要がある。
2	子ども同士の関わりを大切にしたい支援を行っているため、職員の判断に委ねられる場合が多く、支援のタイミングや関わり方について、職員間での共通理解に差が生じる可能性がある。	画一的な支援ではなく、子どもの状況や場面に応じた柔軟な関わりを重視している。そのため、職員一人ひとりの経験や視点に基づいた判断が求められる場合が多く、支援の優先順位や関わり方について共通理解を深める機会が不足すると、職員間での支援の捉え方に差が生じやすくなる事が要因であると考えている。	日常の支援を振り返り、具体的な事例をもとに職員間で話し合いを行うことで、支援の意図や関わり方について共通理解を深め、事業所としての支援を軸の整理していく。
3	日々の生活の中で、子どもたちが自然に学び合う環境を重視しているため、支援の成果や子どもたちの変化が保護者に十分伝わらず、支援内容が見えにくく感じられる場合がある。	子ども同士の関わりや日常のやり取りの中で育まれる学びを大切にしており、計画的・場面設定的な支援よりも、日々の生活の積み重ねを重視している。そのため、子どもたちの変化や成長が一つひとつは小さく、短期間では分かりにくい場合があり、支援の意図や成果を保護者に具体的に伝える機会や方法が十分でなかった事が要因であると考えている。	日々の支援の中で見られる子どもたちの関わりや成長を具体的なエピソードとして整理し、連絡帳や日常のやり取りを通して支援の意図や成果が伝わるよう工夫していく。